

# Rumiko Hagiwara / 萩原留美子

## 厳選作品集・目次(2017-)

### 0. 略歴、活動履歴

1. ゴースト・イン・サイレンス 2017/19 レクチャー・パフォーマンス 20分

ビデオドキュメンテーション: <https://vimeo.com/459925599?share=copy>

2. 沈黙のドローイング 2017/2018 壁に鉛筆でのドローイング テキストのハンドアウト

3. 彫られたアポロジー 2017/2018 石鹸、台座、ターンテーブル、タイトルプレート

4. ビッグ・イン・ジャパン 2021 ビデオ・インスタレーション ビデオ (20min)、コイン (アクリル, 直径15cm)

5. Mono/Butsu(物) 2019 サウンド・インスタレーション 4分、ループ

台座、タイトルプレート、サウンドプレーヤー、プログラムされた回転モーター

ビデオドキュメンテーション: <https://vimeo.com/371205220>

6. Far Away Hopeful Grand Land/遙かなる大地へ 2023 ビデオインスタレーション 50min.

ビデオ作品のリンク: <https://vimeo.com/815944794?share=copy>

パスワード:ahaha

7. HNDKTF(ハンカチーフ) 2023 40部のマルチプル Matheus de Simoneとのコラボレーション

赤い糸、ハンカチーフ、インストラクション、オリジナルの箱にシルクスクリーニング・プリント

8. I Want to Be a Shell/私は貝になりたい 2019/2023 ビデオ・インスタレーション

ビデオ(25分), シェルロゴ (アクリル, MDF)とその影、ランプ、楽譜、カラオケ音楽セット(マラカス、タンバリン)

ビデオ作品のリンク: <https://vimeo.com/815940258?share=copy>

パスワード:Shell\_J

9. シェルのメタモーフosis 2023 インスタレーション

プログラムされ回転するモービル彫刻、スポットライト、シェルの形をしたグッズ、 シェルの形をしたミラーシート・プラットフォーム

ビデオドキュメンテーション: <https://vimeo.com/868310595>

## 略歴

---

1979年、群馬県で生まれ。東京造形大学を卒業後、オランダに渡り、ライクスアカデミー・アーティスト・イン・レジデンスでの滞在を経て、現在もアムステルダムを拠点にして活動している。萩原の作品制作は、日本人としてヨーロッパに身を置く上での独自の経験から生まれる疑問や文化の差異が題材になっていて、日常生活で見逃されがちな物事や不合理な事象を敢えて強調することによって構成される。写真、ビデオ、インスタレーション、パフォーマンスなど、様々なフォーマットを用いて体現された作品群は、微妙かつ時に遊び心のある詩的な表現で、人々に物事への新たな視点を提供する。

## 活動履歴(一部省略)

---

- 2023 「ペトロ・メランコリア/Petromelancholia」 ブルガス・アートセンター、ロッテルダム
- 2023 「遙かなる大地へ/Far Away Hopeful Grand Land」 (個展)CAVE AYUMI Gallery、東京
- 2022 「FAAP Artistic Residence」(3ヶ月のAIR) サンパウロ、ブラジル
- 2021 「From Amazon to Olympic」 天神山アートスタジオ、札幌 x Barim、広州広域市、韓国
- 2021 「The Botanical Revolution」 ユトレヒト・セントラル美術館、オランダ
- 2019 「Elsewheres Within Here」 フレーマー・フレイムド、アムステルダム、オランダ
- 2018 モンドリアン財団「Werkbijdrage Bewezen Talent」(4年間の制作活動助成金)
- 2018 「つまずく石の縁 -地域に生まれるアートの現場-」 アーツ前橋、群馬
- 2017 「ゴースト・イン・サイレンス」(個展)Van Zijll Langhoud Gallery、アムステルダム
- 2017 「Air Berlin Alexanderplatz」(4ヶ月のAIR) ベルリン、ドイツ
- 2016 「Made in Japan」 アートセンター・ストロムビーク、Grimbergen(ブリュッセル近郊) ベルギー
- 2016 「Capitalist Melancholica」 HALL14/Center for Contemporary Art, ライプツィヒ、ドイツ
- 2015 「In Praise of Laziness」(Mounira Al Solhとのコラボレーション)Sfeer fan Ynset-1st Beetsterzwaag トリエンナーレ、フリースランド、オランダ
- 2014 「IDFA Amsterdam Art weekend」 アイ・フィルム美術館、アムステルダム
- 2014 「If you make that kind of joke, then we call it a lie」(個展)JeanineHofland Galleryアムステルダム
- 2013 「Oh my lovely city」(個展)CEAC-Chinese European Art center, 廈門市、中国
- 2012 「Urban Synesthesia - 城市・魅惑」 Arki Galeria, 台北、台湾
- 2011 「陰翳礼讃/In praise of shadow」(個展) Jeanine Hofland gallery, アムステルダム
- 2008/2009 ライクスアカデミー/Rijksakademie van beeldende kunsten(2年間のAIR)アムステルダム
- 2004 東京造形大学美術学科 概念コース卒業

I am greeting as well as apologizing



CC strombeek (ベルギー)でのパフォーマンス



CAVE AYUMI Gallery (東京)でのパフォーマンス

このパフォーマンスのタイトルは、ユーモアを意味する中国語「幽默」から連想された。菫原が日本人としてオランダへ移住し、その環境で起こる様々な誤解や、彼女自身の感覚のズレを例に挙げ、異文化間での物の意味の取り違いや、西洋アートの文脈に置かれた時のアジアのユーモア感覚の翻訳不可能性をレクチャーする。異なる文化背景で生きるということは、コミュニケーションに常に誤解と矛盾を幾許か含む。テキスト、スピーチ、イメージを組み合わせた映像を通して、アジア系から見たときにはユーモラスな要素を持つけれども、西洋の文脈で訳されるときに完全に誤読され、想像的で詩的な表現になる瞬間について物語る。

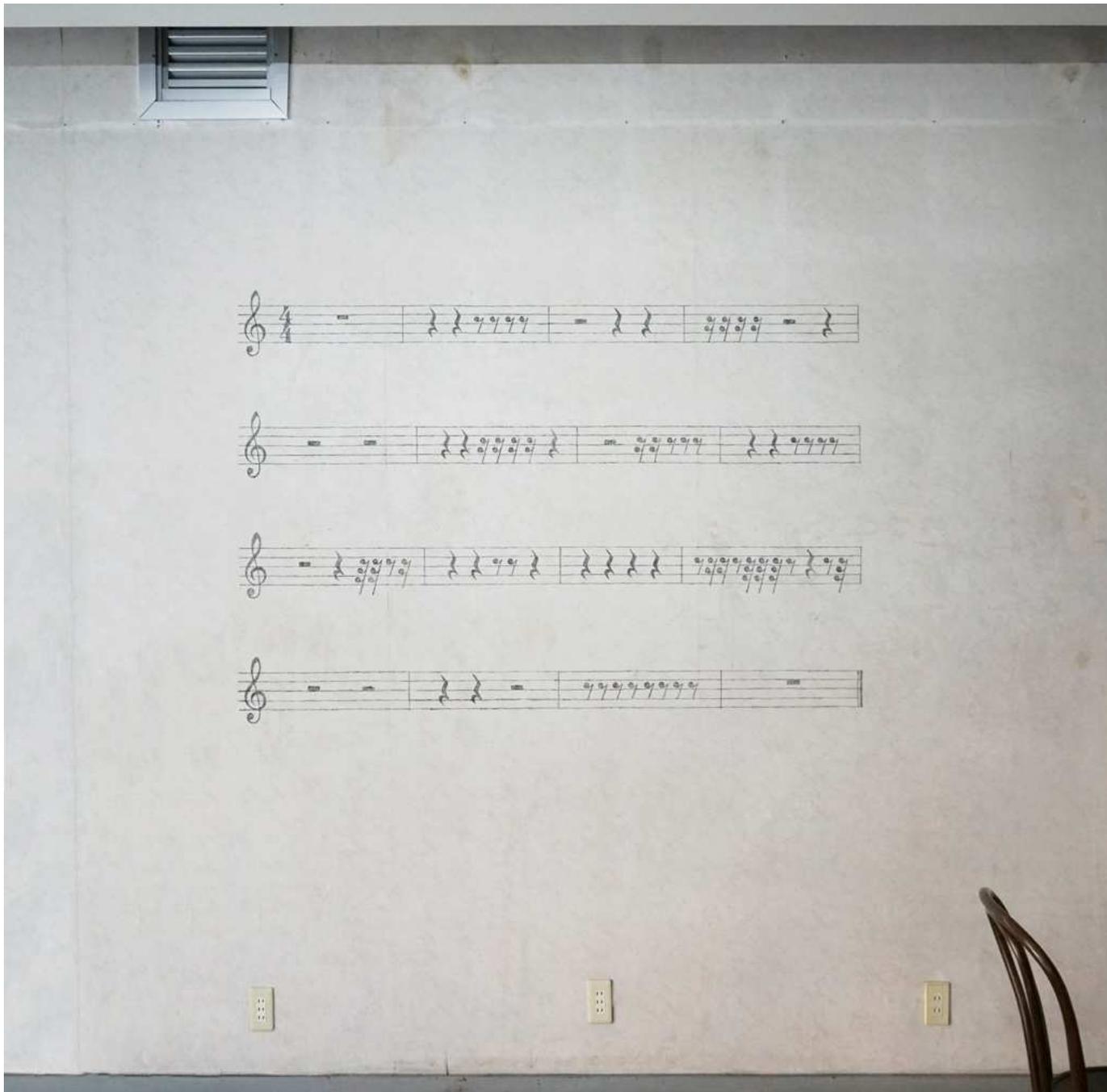
ビデオドキュメンテーション: <https://vimeo.com/459925599?share=copy>

ゴースト・イン・サイレンス

2017/19

レクチャー・パフォーマンス

20分



インスタレーション風景・アーツ前橋「つまづく石の縁」

ある時、ドイツの音楽教師が、なぜ休符の位置で音楽を一時停止するのかと聞いてきた。私は答えられなかった。というのも、音楽を一時停止するために休符を使ったのではなく、むしろ音楽に沈黙を挿入するためだったからだ。その先生によると、休符の機能とは音楽の流れを止めることであり、沈黙を表現することではないという。しかし、私の国では沈黙には意味があり、楽譜にはその記号はない。もし静寂という背景が欠けていたら、言葉には深みがないのに。

- 沈黙のドローイングの一部として

様々な長さの休符が並ぶこの譜面は、ただ音がないということを示している。しかし、別の角度から見れば、それは意味のある沈黙のバリエーションである。」沈黙を同じテーマとして、この作品は「ゴースト・イン・サイレンス」とともに発表された。

### 沈黙のドローイング

2017/2018  
壁に鉛筆でのドローイング  
テキストのハンドアウト



インスタレーション風景・Van Zijll Langhout Gallery・アムステルダム

「土下座」は日本の伝統的な謝罪行為であり、この行為に関する日本特有の意味を理解していなかったり、間違った位置で行うと、根本的に異なる解釈をされることがある。

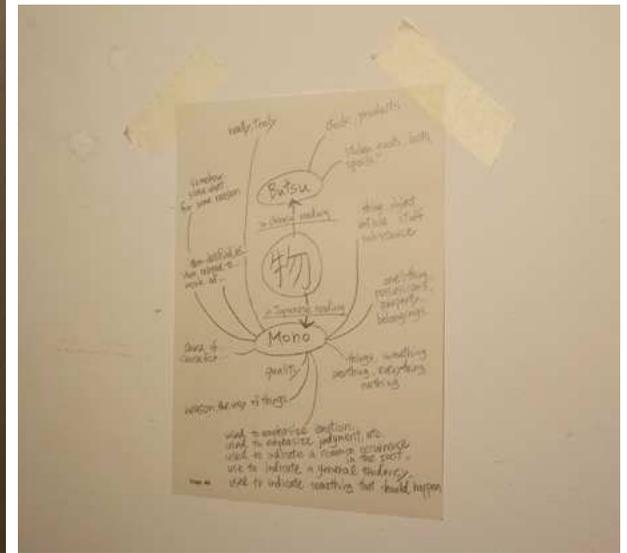
石けんの塊で彫られた土下座の像は、高い台座の上に飾られ、常に回転している。

別作品のパフォーマンス「ゴースト・イン・サイレンス」が土下座について語っていて、この石鱈の彫刻は同時に発表された。

彫られたアポロジ

2017/2018

石鱈、台座、ターンテーブル、タイトルプレート



インスタレーション風景・Althuis Hofland Gallery・アムステルダム

中国に起源を持つ言葉「物」の解釈のバリエーションを元にして制作されたサウンド・インスタレーションである。萩原は、日英辞書による「物」の様々な解釈を読み上げる。「何か」から「無」までが語られる間、何も載せていない台座がくるくると回転する。

物 (Mono/Butsu) 日英辞書から

thing; object; matter; goods; article; stuff; material; substance; one's things; stock, products, stolen goods, money; cash; loot, spoils possessions; property; belongings; things; something; anything; everything; nothing; quality; reason; ---略--- somehow; somewhat; for some reason; really; truly

ビデオドキュメンテーション: <https://vimeo.com/371205220>

## Mono/Butsu 物

2019

サウンド・インスタレーション

4分、ループ

台座、タイトルプレート、サウンドプレーヤー  
プログラムされた回転モーター



インスタレーション風景・バリム・韓国「From Amazon to Olympic」

## ビッグ・イン・ジャパン

2021

ビデオ・インスタレーション

ビデオ (20min)

コイン (アクリル, 直径15cm)

「ビッグ・イン・ジャパン」とは、欧米で使われる慣用句である。それは、自国では比較的無力であり続ける一方、他国で成功することもあるという考えを象徴している。オランダの柔道オリンピック・チャンピオン、アントン・ゲージンクの記念硬貨を仕事でデザインした萩原の個人的なエピソードとともに、ビデオは、世界のさまざまな状況や文脈に適応してオリンピックのスポーツとなった日本の武道、柔道の歴史を物語る。適応過程の中で、武道としての柔道の細部の損失は絶え間なく、複雑な結果をもたらしている。萩原は、この映像の物語と並行して、柔道本来のモットーである真円を描いたプラスチック製の記念硬貨を製作した。



インスタレーション風景・Cave Ayumi Gallery/ 写真: Takaaki Akaishi

2022年秋、萩原は日系人の祖国に対する複雑な思いをリサーチするため、国外で最大の日本人コミュニティのあるサンパウロのアーティスト・イン・レジデンスに参加する。日本国外に定住する日本人女性としての自身の経験を反映しながら、調査は年齢の異なる複数の日系ブラジル人女性にインタビューすることで進められた。これらの抜粋を、ショッピングの場として人気のある日本人街の映像と重ね合わせることで、「リベルダーデ（自由）」という不釣り合いな名を持つその街をめぐる物語を作り上げた。自由をめぐる逆説的な事実、新天地で自由を求めた最初の移民の希望と夢、移民コミュニティにおける世代的、性的、家族的制約を織り交ぜながら、この作品は、資本主義世界の中で他の文化的文脈に混じるという事のメランコリックな現実を展開していく。

ビデオ作品のリンク: <https://vimeo.com/815944794?share=copy>

パスワード:ahaha

Far Away Hopeful Grand Land  
遙かなる大地へ

2023  
ビデオインスタレーション  
50min.



インスタレーション風景・ Cave Ayumi Gallery/ 写真: Takaaki Akaishi

## HNDKTF (ハンカチーフ)

2023

40部のマルチプル

Matheus de Simoneとのコラボレーション

赤い糸、ハンカチーフ、インストラクション、オリジナルの箱  
にシルクスクリーニング・プリント

この40部のマルチプルは、同封された説明書により、紳士用の白いハンカチの新しい使い方を紹介する。リベルダーデ(自由)を相互のテーマとし、「遥かなる大地へ」と同時に発表された。

# HNDKTF



RUMIKO HAGIWARA  
MATHEUS DE SIMONE

2022

## HNDKTF

### 取扱説明書

同封されている無地のハンカチを手で持ってください。

赤い糸と針を手に入れて、「Liberdade」という言葉の刺繍を作りましょう。箱に入っているサンプルハンカチを参考にしてください。

日本の平和のシンボルである折り鶴を続のようにハンカチで作ります。

「Liberdade」という言葉が内側にあり、刺繍の裏側が外側のボディに見えるように、後ろから前に折り始めます。

ハンカチを折り鶴に形作るために、各折り目に非常によくアイロンをかけます。これをしている間、白紙のハンカチは熱で変色するはずです。

この不安定な手で作られた折り鶴について考えてみてください。日焼けした体に赤い傷があることに注目してください。

最後に、別の「Liberdade」ハンカチを好きなように作成します。「Liberdade」は「自由」を意味することに注意してください。



インスタレーション風景・Framer Framed・アムステルダム「Elsewheres Within Here」

## I Want to Be a Shell 私は貝になりたい

2019/2023

ビデオ・インスタレーション

ビデオ(25分)、シェルロゴ(アクリル、MDF)とその影、ランプ、楽譜、カラオケ音楽セット(マラカス、タンバリン)

世界で最もよく知られる石油会社、ロイヤル・ダッチ・シェル・グループのロゴは、日本の横浜で拾われた平凡な貝殻をモデルにしているという話を聞いて、その貝殻の旅路を辿ることにした。このビデオ作品の物語の中心は、その日本の貝殻がいかにして影を失い、資本主義のシンボルの一つに変貌を遂げたかということ、日本人がオランダから西洋絵画の技法を学んだとき、伝統的な平面的イメージに陰影が加えられた事や、ロゴのデザインがより現代的になるにつれ、ボリュームがあるものから平らなイメージへと変化している事などが絡み合うように語られる。オランダに定住する日本人としての個人的な考察を織り込みながら、失われた貝殻の影を取り戻そうとする混乱した試みは、私たちが生きる資本主義世界への加担と、固定した起源を主張することのむなしさを物語っている。

ビデオ作品のリンク: <https://vimeo.com/815940258?share=copy>

パスワード:Shell\_J



ビデオからの静止画



インスタレーション風景・‘I Want to Be a Shell’ と ‘Shell’s Metamorphosis’  
Brutus・ロッテルダム「Petromelancholia」 / 写真: Aad Hoogendoorn



インスタレーション風景・Brutus・ロッテルダム「Petromelancholia」

## シェルのメタモーフオシス

2023

インスタレーション

プログラムされ回転するモービル彫刻、スポットライト、シェルの形をしたグッズ、シェルの形をしたミラーシート・プラットフォーム

貝を形どったグッズで作られたモービル彫刻で構成されたインスタレーション。ロイヤル・ダッチ・シェル・グループの貝殻について語ったビデオ作品「I Want to Be a Shell」に合わせて展示された。ビデオと同期するようにプログラムされた回転運動によって、貝殻は浮遊し、時にはぶつかり合いながらも、彫刻の中でバランスを保っている。貝殻の影が、ミラーシート上に並べられた他の貝殻の上を揺れ動き、さらに壁へ反射、投影される。これらのディテールは、ビデオから流れる皮肉なカラオケ・ソングによって強調され、貝殻の複雑な旅を思い起こさせる。

ビデオドキュメンテーション: <https://vimeo.com/868310595>

